

時をかける八雲

琴浦のまちに生きる精神



撮影 池本 喜巳・文 飯田 若菜

新婚旅行の途中に八橋^{やばせ}に立ち寄った小泉八雲夫妻。
当初単なる通過点に過ぎなかったはずのこの地を

八雲は思いがけず気に入り、

その感動を書簡や随筆に残している。

静かに佇む海沿いの町は、

八雲の目にどのように映ったのか……

来訪から120年、八雲が歩いた道を小泉凡^{ほん}氏が辿る。



「私は八橋ではとても愉快でした。眠り、食べ、泳ぎ、全く快適です。」

—小泉八雲



「旧中井旅館」の2階内部。八雲とセツが宿泊したこの旅館は、現在は旅館としての営業はしていないが、様々な活動に利用されている。

私は八橋を発見しました。八橋はきわめて静かな、美しい小さな町です。わたくしがこれまでに見たものよりずっと立派な旅館が一軒あり—それに素晴らしい浜辺です。(B・H・チェンバレン※1)に宛てた書簡より抜粋)

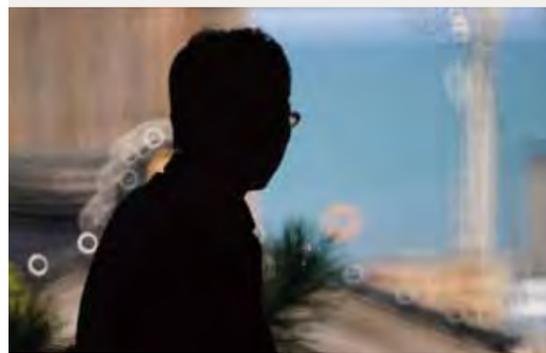
小泉八雲(※2)が妻セツ(節子)を伴って八橋を訪れたのは1891(明治24)年、彼が日本で過ごす二度目の夏だった。松江を出発し、東郷温泉・浜村温泉を目指す新婚旅行の道中に立ち寄ったこの小さな海辺の村について八雲は、「Yabasee」を、発見した、という言葉を用いてチェンバレンに大きな感動を伝えている。

小泉八雲の研究者であり、直系のひ孫でもある小泉凡さんは、「八雲は海沿いの町が非常に好きでした。物質文明が嫌いで、一方それに逆行するもの—きれいな海や浴衣を着て虫の声を聴くとか、そういうことが好きな人でしたから、八橋は彼の嗜好に合っていたのでしよう。景色も美しく、人々がとても親切で、わずかな間に友だちができたときさえ言っています」と語る。

「八橋からチェンバレンに宛てて、八雲は八橋のことやキセルの考察を書いた原稿用紙10枚以上に及ぶ長い手紙を送っています。それだけまとまった執筆ができたほど、ゆとりのあるいい時間を過ごしたのだなあ、と感じます」

八橋の景色は、当時際立って特別なものではなかったはずだ。だが八雲は浜村で旅を折り返してから更に数日、八橋に逗留した。「片道切符で世界を回り続けた人ですから、この町はいいぞ!」という直感が働いたのかもしれない「せんね」と凡さんは笑った。

(※1) イギリスの日本研究者、1873年来日し、海軍兵学校や東京帝国大学で外国人教師として働いた、八雲とは書簡の往復などの親交があった。
(※2) 当時はまだ帰化しておらず、小泉八雲とは名乗っていないが、誌面上はこの名前が統一させていた。



当時は旅館と海岸との間に建物がなく、2階の縁から海が見渡せた。八雲も海を眺めながらゆったりとした時を過ごしていたのだろう。

八雲の歩いた道

伯耆・因幡への旅

写真協力/小泉八雲記念館



八雲のスケッチ

アメリカから日本へ向かう八雲の後ろ姿を、同行者のC.D. ウェルドンがスケッチした。両手に持っている鞆は、小泉八雲記念館に展示されている。

八雲は妻セツを伴って、明治24年8月14日(12日とする説もある)に松江を出発し、下市(現大山町)に投宿した。盆踊りを楽しみにしていたが、伝染病流行のため中止されていた。次に滞在した八橋で地元住民ともにも逢束の盆踊りを見に行ったが、「ピッキ(暮のこと)」と雑言を浴びせられ、逃げ帰ることに。後、八橋の警官と有力者が

逢束の人々の無礼を詫びに旅館を訪れ、歓待を受けたという。それから由良で約二日間逗留。奈良漬けを非常に気に入り、以後奈良漬けを「由良」と呼ぶようになった。続いて東郷温泉だがうるさい客や賑やかな雰囲気が入らず、一週間の滞在予定をかなり繰り上げ、由良へ戻ってしまった。そこから浜村温泉へ行くも、やはり伝染病のため盆踊りは見られなかった。再び八橋へ戻ってしばらく滞在し、8月25日、美保関へ向けて出発。同29日、松江に帰り着いた。約二週間の旅行であった。



八雲とその家族

妻・セツ(右)と長男一雄(中央)、小泉凡さんの祖父にあたる一雄は、松江を離れた後に赴任した熊本で生まれた。写真は神戸時代のもの(1896年頃)

小泉 八雲/パトリック・ラフカディオ・ハーン

1850年6月27日ギリシャのレフカダ島でアイルランド人の父と、ギリシャ人の母との間に生まれる。2歳の時、父母の離婚によりアイルランドに住む大叔母に引き取られた。16歳のときに左眼失明、父の病死などの不幸が重なり退学。19歳でアメリカへ渡り、その後新聞記者となる。

1890年39歳のとき記者として来日。帝国大学(現在の東京大学)のチェンバレン教授や文部省の紹介で、島根県尋常中学校及び師範学校の英語教師となる。そして、武家の娘小泉セツと結婚し武家屋敷に住んだ。松江に1年3ヶ月過ごした後、熊本、神戸、東京へと移り住んだ。

また日本の伝統的精神や文化に興味をもった八雲は、多くの作品を著し、日本を広く世界に紹介した。1904年9月26日、狭心症のため54歳で逝去した。

煙管と煙草入れ

細かい細工が施された日本の文様を、八雲は大変気に入っており常に携帯していた。また実用品としてだけでなく、煙管については100本以上も収集していた。



『知られぬ日本の面影 (日本瞥見記)』

アメリカで出版された、2巻からなる来日第一作。表紙が竹のデザインでできているため八雲はこれを「竹の本」と呼んだ。「盆踊り」の章を含めた、松江時代の暮らし、人々について記した作品集。



松江城北側堀沿いに立ち並ぶ武家屋敷の一角が記念館となっている。その隣には「小泉八雲旧居」があり松江で過ごした八雲を身近に感じることができる。

小泉八雲記念館

〒島根県松江市奥谷町322
☎ 0852-21-2147

左目を失明して以来、左を向いた写真が多い。横向きではない唯一の写真。1880年撮影。